

1. はじめに

「Trois milliards de pervers : Grande encyclopédie des homosexualités」（「三〇億の倒錯者：同性愛大百科」）は、1965年にフェリックス・ガタリが創刊した雑誌『ルシエルシュ』12号のタイトルである。1973年3月に発行されると（近年新たに再版される）、スキャンダルを巻き起こし、同性愛がフランス社会に一気に入り込んだことを裏付けた。モラルに反するとして発行直後に発禁、押収、断裁され、同性愛の苦闘の歴史における画期的存在となった。歴史的文書であると同時に、現代の解放運動を反映するものとして、同号は、社会的空間に広がる規範構造を根本的に壊すと捉えられた同性愛の主張について、その何たるかに光明を投じている。

カフェや政治集会、刑務所、保護施設や公園、用を足しながらと、さまざまな場所や場面で得られた証言やオリジナルのテキストとインタビュー、歯に衣着せぬ社会批判、文学、哲学、精神分析を取り入れただけでなく、ジル・ドゥルーズ、ファニー・ドゥルーズ、ミシェル・フーコー、ジャン・ジュネ、フェリックス・ガタリ、ダニエル・ゲラン、ギイ・オッカングム、ジャン=ジャック・ルベル、俳優マリー=フランス、ヴェラ・メミ、ジャン=ポール・サルトル、ジョージ・ティボーなど著名人からの寄稿も集められた「三〇億の倒錯者」は、あらゆる形の欲望的生産に異議を唱えるために、セックスアピールやマスターベーション、異性装、スカウト運動、戦闘的運動に影響を及ぼす同性愛の集大成という形をとっている。従って、本稿では、全く「新しい科学的精神」を確立することを目指した。

この度、この歴史的雑誌の一部を「La Femme de drague」（ナンパする女）¹というタイトルで再版することにした。これは、7人の女性が「誘惑」という社会と感情の有機的営みについて語る座談会である。なお、座談会の前には、雑誌押収後の1974年、フェリックス・ガタリの裁判で行われたミシェル・フーコーの証言を収録している。

¹TN：名詞「la draque」と動詞「draquer」の意味は、話し言葉の「ナンパ（する）」で、一般的にセックスすることを目的としており、多くの場合は行きずりだが、必ずしもそうとは限らない。動詞「draquer」は、「ナンパする」以外にも、「誘いをかける」、「言い寄る」、「口説く」、「気を引こうとする」、「モーションをかける」などさまざまな言葉に翻訳される。70年代のゲイカルチャーでは、ナンパする目的で盛り場などをぶらついたり、車で流したりする行為（クルージング）を連想させる言葉である。

2. フェリックス・ガタリの裁判で行われたミシェル・フーコーの証言

「この裁判には3つの問題点があります。

まず、明らかなことですが、私が思うに、争点が表現の自由であるということです。ポルノグラフィなのか、そうでないのか。最も重要な点ではないものの、裁判所は今回の裁判の争点をこの1点に限定したがついています。

実は、この最初の疑問の裏には、また別の疑問が隠れており、こちらの方が遥かに深刻な問題なのです——性行為としての同性愛、ホモセクシュアリティは、いわゆる通常のセクシュアリティと同じ表現の権利や行為の権利が認められているのか。とはいえ、予審判事が主張しようとなさっているのは、こうした観点からではではありません。

3つめは基本的な問題です。政治とセクシュアリティとの関係です。

セクシュアリティ、性的権利の要求、本人が望む性行為を行うことができる可能性は、政治的権利たり得るのでしょうか？ こうした観点で、極めて政治的な目標を掲げるムーブメントを作ることは可能なのでしょうか？ これは、セクシュアリティを政治闘争に取り込むという包括的な問題なのです。

さらに、この裁判では根本にかかわる問題が取り上げられています。つまり、この裁判にかかわる政府も判事も、こうした観点で挙げられた疑問点を避けたがついているということです。ですから、裁判の争点を遥かに安易な問題「これはポルノグラフィなのかどうか」に限定しているのです。

有罪とされる出版物は、本当にまじめな学術的研究調査なののでしょうか、それとも、猥褻な話を集めたものなののでしょうか？ 私は、そういう罫にかかっているとは思いません。この雑誌の内容、イラストの本質、価値観、ポルノグラフィの境界線（越えているものもあれば、いないものもありますが）、そういったものは全て重要ではない、私はそう思います。問題として深刻なのは、繰り返しになりますが、政治におけるセクシュアリティなのです。MLF²が重要視してきた問題、つまり、中絶の問題に関していえば、ロワイエ氏³でさえ大統領候補として担ぎ出されているのを見る限り、この問題は現代社会の重要な部分を担っていることが分かります。しかも、重要なのは社会にとっただけではありません、政治にとっても重要なのです。

というのも、**身体**にかかわる政策はこれまでも行われてきたからです。★実際、17世紀から18世紀の間、人の身体は、労働力として利用、拘禁、抑制、抑圧されてきました。当時の政策は、利用可能な最大限の労働力と利用可能な最大限の生産時間を引き出

² フランスの女性解放運動

³ ジョルジュ・ポンピドゥー大統領が1974年に死去すると、ジャン・ロワイエは「道徳秩序」を主張して大統領選に出馬している。

すことで成り立っていたのです。現在問題になっているのは、我々人間は、自分自身の身体、さらには他人の身体やこれにかかわる全てのことに對して、労働力として利用する以外の目的で、その所有権を取り戻すことができるのか、ということなのです。

セクシュアリティを政治問題に変えているのは、我々自身の身体を巡る戦いなのです。このような状況で、いわゆる「正常」なセクシュアリティ、つまり、労働力を生み出す生殖活動を伴うセクシュアリティこそ——他の形態のセクシュアリティを拒絶し、女性は服従させるものだとする観点から、その「正常」なセクシュアリティが前提条件として必要とすることもひっくるめて——基準であると考えたがります。だからこそ、身体の所有権を取り戻す政治運動においては、女性解放や男であれ女であれ同性愛の運動が目につくのも至極当然なのです」

3. ナンパする女性

クリスティアーヌ：ナンパする方法はたくさんありますよ。私は、自分が口説いているのを人から見られたことはないかな。気づかれずにうまくできるから。私がどうしているのか教えましょうか。たとえば、「一緒に来ない？」と声をかけて、直接アプローチする方法。他にも、受け身に徹するという手も使う。女性によくありがちな方法だけど、女性ってそうじゃない？ 相手が男であれ女であれ、アソコを目指して突進、ということはずあり得ないでしょう。「準備ができてますよ」、「その気がありますよ」と相手に見せる。それを気づいてもらったら、あとは相手にお任せ。失敗しようがない。これって、ルールの中の1つ。気をつけなければならないのは、場所と時間と状況を間違えないこと。そぶりも重要ね。

アニー：相手から求められていることをする……

キャシー：それは相手との関係性の問題なのではないかな。片方が先に動いて、もう片方がそれについていくという関係性。主導権を握るのが男の場合もあれば、女の場合もあるのでは？ 私は女だけれど、女性からそんなふうされたことはこれまでもある。だから、これは性別の問題ではなくて、人間関係の問題ではないかと思う。片方が先に動いて、もう片方がついていくという関係。

クリスティアーヌ：今はもう、女だからこうだ、と決めつけられないということね。自分から声をかけられない頃ってどんな感じでしたっけ？

オザン：私は自分から声をかけたかったけれど、どうしたらいいのかわからなくて……誰かとつながりたかったけれど、どうすればいいのかわからない時期がありました、何だか強引な感じがして……。自分から手に入れようとするなんて、とてもできません。思わず身がすくんでしまって。結局、何もできませんでした。ただ誰かにつながればいいのかも思っていなかったの、口説き落とそうなんて考えてもみなかった。どうすればいいのかわかりませんでした。人とつながる方法は他にもあるように思うけど。

クリスティアーヌ：誰かとつながることとナンパすることは同じではないの。私もよくナンパしたけれど、何だか惨めな気分になるものよ。あなたのことを何とかできないかと狙っている人や、女王様のようにちやほやしてくれる人たちが周りに誰もいないとしたら、蔑ろにされた孤独な気分になって、惨めで一人ぼっちで寂しくなるでしょうね。いい気分だなんて、とんでもない。そんなときに、たまたまカフェに出かけて、自分の殻に閉じこもらないで、周りを見回したりしていると、誘惑していると思われるでしょうね。人が大勢いる場所に踊りに行けば、落ち込んで、惨めで嫌な気分になるかもしれないけれど、考えてみれば、ナンパって、そこにいて、目の前で起きていることをよく見て、いざ何かあったらそれを逃がさない、ただそれだけにすぎないのだと思う。

受容力

オザン：それって、私なら「ナンパ」とはいわないわ。受容力かな。

アンヌ：私だったら、そういうことがあっても最後まではいけないと思いますよ。たとえば、本当に寂しくなって、今の話みたいに、モンパルナスのラ・クーポール（さもありなん、でしょう？）に飲みに行ったことがあったけれど、たとえ誰かからたまたま話しかけられたとしても本を読んでいるふりをすると思う。ナンパされたら、ただそこに座っておしまい、ではすまされないでしょう？ だって、関係を持ちたい理由が私の顔だけが好きだからだなんていうことはあり得ないですもの。最初は顔だったとしても、目的は顔ではなくて体に違いないし、ひょっとしたら、単に私が女だからかもしれない。つまり、意味のある関係なんて期待できないでしょう？ つきあうなら、長く続かなくちゃいけないと思ってるの。そうでなければ、体を売ると同じでしょう？ 私は2回か3回、そういう関係を持ったことがありました。道で声をかけられたんだけど、結構顔がよかったから、話をして。その黒人の男とはリュクサンブール公園を散歩しました。相手が画家のときもあったけ……ひとしきり話をしたあと、2〜3日後にデートの約束をしたけれど、相手は姿を現さないというお決まりのパターン。地下鉄で、外国人のグループに言い寄られて、何も考えず話をしたこともありました……あるときなんて、男から追いかけて、見下されながら延々と熱弁を振るわれたこともあったし。何の下心もなく地下鉄で礼儀正しく相手をしただけで、それ以上どうにかなろうだなんて一切思わなかったけど。月刊誌『五月手帖』4のダンケルクの大手製鉄会社ユジノールに関する会議では、労働者たちが同席していることがありました。左派の質問があまりにもバカバカしかったので、そんな質問は馬鹿げているのではないかと私は伝えたのです。そのあとで、労働者の皆さんと一緒に飲みに出かけました。寝る場所など彼らの予定は全て決められていて、翌朝は、リヨンの会合に参加するため、飛行機に間に合うように6時には起きることになっていてね。会議中に私のことをチラチラ見ていたとてもいい感じの男性がいて、その人が、「君のところ、空いてるよね？」と話しかけてきてね。そのあと、2人で夜を楽しく過ごして、電話番号と住所を交換したけど、もうそれっきり。そういう、あと腐れのない関係は2回か3回経験ある。それがナンパかどうかは分からないけれど、それまで私が抱いていた「気楽な関係＝下劣」というイメージとはかけ離れていました。

オザン：結果は？ 音沙汰なし？ 全く何も？

アンヌ：だって、どうでもよかったから。たとえば、ある日、帰宅途中に何冊か本を抱えていたことがあって、どちらかというイケメンタイプの男性が近づいてきて言ったんです。「これってどうするの？ 真夏の午後に、女の子が3冊も本を抱えているなん

⁴ 『五月手帖』（*Les Cahiers de Mai*）は1968年5月の「5月革命」の直後に創刊された雑誌で、1974年まで発行。同誌の目的は、革命的な労働者のグループ同士のつながりを構築することだった。その目的のもと政治集会が組織され、約15もの工場で働く労働者らも活動家として参加した。ダンケルクのユジノールの工場もそのひとつ。

て信じられない。何を讀んでるのかな？ 見せてよ……へえ、哲学か。珍しいねえ。なぜ讀んでるの？ 一緒に話したいな」。それで連れていかれたのはカフェ。その人は画家でね、彼の絵を見たいと思ったの。仕上げのニスを塗らなければならないというので、見せに連れていってくれた。いろいろ話してくれた。自分の絵がなぜ良くないのか、お金がどうやって回っているのか、契約のせいで、画家は特定のサイズの絵を毎月描かなければならないこととか。その日の午後、ずっとおしゃべりした。それから、家まで送ってくれて。私の体に触れ始めたのはサヨナラしようとしたとき。また会いたいっていいながら。そのとき、自分には妻がいるけれど、それが頭に来るほどひどい女だから捨てたんだと言い始めてね。あまりにひどい話で私の方が頭にきちゃった。とにかく、家の電話番号を教えて、おしまい。関係を切りたいときには家の電話番号を教えることにしているの。家には絶対いないから。

キャシー：今教えてくれた話は、ナンパされたときの話よね。ナンパしたのはあなたではない。確かに、世の中にはいろいろなタイプがいるけれど……声をかける方かかけないか。私は全く声をかけないタイプです。でも、これは決して、異性愛か同性愛かという問題ではない。

クリスティアーヌ：他にも指摘したいことがあります。私は女性をナンパしたことがないのね。女性が声をかけてきて、つきあったことは何度かあるけど。私には、引き寄せの力、それに、お互いの関係を深める力があるのね、それはつまり、ひとりの人として見るということ。でも、相手のどこが好きなのかは分からない。見た目とは限らないし、話す内容や人物そのものなのか、具体的に何なのかは分かりません。そういう場合、相手との相性がいいな。あくまでも、その人との関係性の問題。私は女の子をナンパしたことはありません。私にとってナンパは慣習の世界の話で、慣習は異性愛のもの。つまり、ナンパは男が女にすること。でも、女は慣習の影響を受けません。女にとって重要なのは関係性なんです。

オザン：でも、女性からナンパされるのはアリなのでしょう？

慣習としてのナンパ

クリスティアーヌ：それはアリだと思う。私は身構えすぎていたのかもしれないな。仲良くなろうという気分になっても、単に気がつかなかっただけかも。明らかにナンパされていると分かったときには、ひねくれて堅苦しい態度を取ってしまう。だから、もし自分がナンパする側だとしたら……言い寄られても、身構えてしまうくらいだからね。慣習ではなくて、自然なことでない私には無理かも。ナンパは、セックスするという慣習につながっている。つまり、セックスはお決まりのコースということ。

オザン：ナンパするときには、相手を身構えさせたとは思わないのですか？

クリスティアーヌ：実際どうかは別にして、私は極力ナンパしていることを悟られないようにしている。いずれにしても、周りに4人も仲間がいるのに、お構いなしで迫ってくる男から、「ほら、僕たちだけだよ、かわいこちゃん」なんて言われたときの私ほど、相手は身構えないでしょう。

キャシー：その話は、慣習的な異性間のナンパのことだよね。声をかける側とかけられる側に分かれるナンパには、明確な役割がある。ほんの短い期間だったけど、異性を好きになったときには、ナンパする側だった。さっきアンヌが話していた、「あっ、この男、私をナンパしようとしているんだ。ふ～ん、この人ならいいかも」というようなタイプではなくてね。「この男ならいいな。声をかけてみよう」と自分で納得するタイプ。全く受容じゃない。ナンパするときは、相手が男性でも女性でも同じアプローチ。

クリスティアーヌ：男性をナンパするときはキャシーと同じような感じ。でも、私の場合、悟られないようにやります。普段通りの何気ない態度でメッセージを送るくらい。決して、突然アソコに飛びついたりしないわ。

キャシー：アソコに飛びつくという話が出たけど、身構えすぎている限り、飛びついたって私はいいと思うけど。ゲイの友人が話しているのを聞いていると、アソコに飛びついたりしないみたい。まずは言葉を交わしながら2人の関係を深めてた。「ジッパー」がどうのこうのという話ではないみたい。どこからナンパが始まって、どこで誘惑が終わるのかはよく分からないけど。

アニー：MLF⁵にも、特別な場所がいくつかありますよ。カトマンズ⁶に踊りに行く女の子たちもいます。その話を聞くと、私はいつもカンカンになっちゃう。女の子を求めて踊りにいくっていうんだから。

キャシー：私の場合、誰かとカトマンズに踊りに行くときは、まだ肉体関係はないけれど、発展する可能性がある場合かな。カトマンズに行くことでそうなるかもしれないし、一緒に外食することでそうなるかも。

オザン：女の子に近づける場所はそれほどたくさんありません。カトマンズならリラックスして楽しめるのでは？

「すぐにピンとくる2人だけのルールは、ナンパのときにしか分からない」

キャシー：ナンパで私がすごく気に入っているのは、人とのつきあいであること、それに、どう表現するかの問題であること。私が望んでいることでもあるのだけれど、お互いが2人のルールを理解できる限り、そのルールから本当の人間関係が生まれてくるは

⁵ 脚注1を参照

⁶ バリの女性用レズビアンディスコ

ず。すぐピンとくる2人のルールは、ナンパのときにしか分からない。ある場所に行くと、そこにはあなたを見つめてくる人がいる。それって、すぐにでもその人と何かが起こる可能性があるということでしょうか？ すぐに何かが起こるかもしれない状態って、すごいと思う。何がそんなにすごいかと言うと、そういうときにどういう態度を示せるかで、何かが起きる場合だってあるから。

クリスティアーヌ：私はまだまだスケッチの段階なのに、キャシーはもう仕上げに進んでいるのね！

キャシー：ナンパでスケッチの段階といえば、セックスする相手をつかまえたとき、グッとくる相手が見つかったとき。そのスケッチががらりと変わって、ナンパから2人で楽しむゲームになることだってある。お互いをよく知らない2人が、会話の中でお互いに探りを入れるゲームで、セックスだけが全てじゃないわ。

ナンパする相手は？

アニー：私はこれまでナンパしたことはありません。ナンパされたことはあるかもしれないけど、身構えていたから気づきませんでした。前にも話がでたけれど、口説いてくる人は、顔や体に興味があるだけで、人として見ているわけではないでしょう？

キャシー：私はそうとは思わないかな。ある程度、他人に対する感受性があれば、相手の顔にだって、体にだって、その人の個性やその人らしさって見えるものでしょう。

アニー：その人らしさって、自分自身のイメージを示すということでしょうか？ それって偽りのイメージなのではないかと思うんだけど。

キャシー：ほんの少しでも人とのつきあいがあるのなら、見た目で分かるでしょ。だから、相手に声をかけるとき、たとえば、青い目だけを見てそうするわけではないということ。

アンヌ：私はまっぴらごめんだけれど、体が目当てなら、それがあの人よりもこの人をナンパする理由にはなりません。私の場合、何度も会って、話すのを聞いて、考えていることや話し方が分かってからでないを選べません。なぜって、それが判断基準だから。でも、見た目だけなら、行きずりの人のレベルでは、ファシスト顔以外は誰でも同じ。ファシスト顔でない人って結構たくさんいますよ。

キャシー：それってたぶん、どれだけ可能性が広がるかの問題なのでは？ 私の場合、かなり具体的。ある数字が……でも、もしその数字を決めたとしても、これまでの経験とは全く関係ない。いろんな人がいるからね。そもそも、それで選んでくれなんて誰からも頼まれないし。その数字が決め手になるのは、他にもいろいろ気になることがでてきたときだけ。

アニー：でも、もし外見で判断しはじめたら、ナンパする相手はいつも同じにならないのでは？ 影が薄いとか、目立たないとか、同じタイプの人。通りでナンパするなら、見た目判断するでしょう？

キャシー：そうとも限らないと思うけど。それって、どう思うかの問題じゃない？ 学生時代、寮生活を送っていたとき、誰もが注目する女の子が2~3人いた。その子たちって孤独で寂しそうで、自分自身が好きじゃなかったみたい。自分のことを醜いとも感じていたみたい。それに、私の注目する人が、他の人から注目されていないとは決して言えないし。

クラブ

カトリーヌ：私はほとんど誰に対してもほとんど何も求めません。ナンパって、私には使えないルールがたくさんあるんです。たとえば、クラブにいくと、女の子たちがお互いに目配せしているのが分かるのですが、そういうことができないんです。本当にダメなんです。誰か引っ掛けようとしてクラブに行っても、ちっともその気にならないんです。クラブにいる女の子たちを見ても、これっていう子は1人もいません。それじゃあ、この子がいいかどうか、コインの裏表で決めることにしよう、ってなるんです。はじめてナンパしようと思ったのは、6年間つきあっていた彼女と別れて4年も1人きりだったので、これじゃあいけない、と思ったから。一步踏み出して、「こんにちは、名前は？」と話しかけたときは、まるで3階から飛び降りた気分でした。

キャシー：すぐにクラブの外でナンパするようになるから、大丈夫。だって、クラブって、ルールもへったくれもないでしょう？ いつも同じ狭い閉塞した世界で、すぐに腹が立つはず。いつであれどこであれ、パパッとナンパするのはスリル満点だし。

アニー：でも、他の同性愛者に出会えるムーブメントが起る前、クラブに行くしか手段がありませんでした。

女性に対する性欲がある限り、どんな女性でも同性愛者なのか？

アニー：同性愛のムーブメント以前、出会った女性は同性愛者も異性愛者も同じくらいの割合で存在していて、私はどちらなのか気にせず恋愛していました。好きになった異性愛の相手は、いつでもカチカチに身構えていました。

キャシー：リラックスした異性愛者に出会うこともできる。そうでない人は、最初は身構えてしまうだろうけど。女の人生で面白いなと思うのは、私と一緒にいて、私の目の前にいるときの彼女の様子。相手の過去とか未来とか、最初はちっとも興味なんてない。最初は、相手が何者なのか知っているかいないかなんて、そんなことどうでもいい。

クリスティアーヌ：私なんて、何の役にも立たないことばかりだった。返事がなくて。メッセージを送っても、返事はない。他の人に送っても返事はない。飛行機で逃げていっちゃった。本当にそんなことばかりなの。問題は、「同性愛者？ そうなの？ じゃあ、寝ようか」なんて、聞くつもりがないことかな。つきあいを始めるための最初の一步の問題。相手が異性愛者で、同性愛に何の興味も持っていなければ、友情っていう形の関係になるでしょう。

アニー：友人関係の作り方を知らなければなりません。友人関係って、言葉で作るものだから。まずは話し方を知らない。私なんて、黙りこくったままだったことが何百回もあります。自分の言葉や教養で人の関心を引く方法なんて知らなかったから。

カトリーヌ：私の周りの女の子たちはほとんどがおしゃべり上手。知ったかぶりして誘惑してきますよ。だから、私がやっても意味ないと思います。土台、うまくいかないし。

楽しみを心待ちにして共有する

キャシー：私も最初はそう思った。何か期待されているのは分かるんだけど、一体何を期待されているの？ ミッションを遂行できるの？って。目の前に相手がいる、そんなことを考えているようだったら、たいてい破綻する。クラブなんてどうでもよくなってきて、これからずっと1人かとも思い始めた頃、問題は、どうすればいいのか誰も答えられないようなことをやるつもりが私にあるかどうかではなく、これから先の楽しみを分かち合えるかどうかだった。半年でデートしたのが10分となると、恋人ができたらしどれだけ楽しいだろうと思いはじめるものでしょ。楽しみを想像し始めたら、それを分かち合い得るかどうか知りたくなる。これって、個人で悩む問題ではないでしょう。きっとみんなにとっても重要な、根本的な価値観の問題だと思う。

アンヌ：楽しみを心待ちにする気分は、繰り返し経験しているのでよく分かります。またデートできると思うだけでうれしくなる。でも、最初は心底怖気づいてしまうし、きっと散々な目にあうに違いないという予感もします……

キャシー：でも、こういうときに感じる「散々な目」ってどういうこと？

アンヌ：散々な目、う～ん、たとえば、話をしているうちにお互い泣きたいくらいうんざりしてきます。それで、相手が男だったら立たなくなったり、私が完全に拒否したり、他にも、相手がいるのに別の女の子とセックスしたときには、とても不愉快で、がっかりしました。そんな体験は本当に嫌で、もう二度とこんな思いはごめんだと思うし、新しいつきあいが始まりそうになっても気持ちが前にいきません。本当に愛し合っているのなら、努力しなくちゃいけないなんて理不尽でしょう？ たとえ最初はどううまくいかなくてもね。

クリスティアーナ：これまでのよくあるナンパだと、相手に対する配慮が全くなくて、相手をモノとしてしか扱わない人っているでしょう？ こうしたタイプの関係って経験ある？

アンヌ：私の印象では、今でもナンパして、相手をモノみたいに扱う男はいます。受け身や守りではなく、人として対応すれば、尻尾を巻いて逃げ出しますよ。

カトリーヌ：私は、すごくイイ感じでナンパされて、この人のことをもっとよく知りたいと思わず感じたこともあります。

あなたの魅惑力をテストする

キャシー：あなたの魅惑力をテストするのはどうかな？ 6カ月間恋人をしている相手から「きれいだよ」と言われるのと、見知らぬ人から言われるのとでは、それほど違いはないと思うんだけど。どちらでも自信がつくでしょうね。

アンヌ：でも、ナンパされて「私は美人」と安心するのは、何かと比較して安心するのと一緒にしょう？

キャシー：これは、美しさの問題ではなくて魅惑力の問題。「力」といっても、私が言いたいのは、潜在能力や可能性のことで、「私はかわいい、魅力的だ」と思えるかどうか。たとえば、「私には美しい文章を書く潜在能力がある」と思えることと同じ。

レイチェル：でも、人と、頭の中にある文書やアイデアとでは同じじゃないのに。

キャシー：なぜ誘惑力を他の能力と並べて考えてはいけないの？ 自分自身で証明したいときってあるでしょうに。

アンヌ：セックスの相手とつきあい始めるための手段としてナンパを捉えるのなら、ナンパがなくなる理由はないでしょう。それに、つきあいを始める方法はいくらでもあるし。

クリスティアーナ：あなたがやっていることがナンパなら、ガールハントで遊びを求めている人のように私には見えるな。つきあいを始めるのとは全く違う。もちろん、重なっている部分があるのはよく分かっているけれど、それでも、ナンパすることとつきあうこと、この2つは違う領域のものだと思うの。ガールハントや他人を遊び相手として見るのが、ナンパの始まり。

キャシー：その考え方って、とても二元的（ルビ：マニ教的）だよな。深く結びついた長く続くつきあい、つまり、知的な関係性において、少なくとも始まりの時点で、あなたのいうガールハント的な範疇にはいるものは全くない。私の話をするけど、人生で2回しか会ったことのない女の子がいてね、その子とは寝たいと思ってる。確かに下心は

あるけれど、だからといって、相手がそれに気づく必要はないわよね。確かに、最初は遊び相手になってしまうけど、始まりがそうだからって、いつかはすばらしい満たされた関係が続けられないというわけじゃないでしょう？

レイチェル：私にとってナンパって、とてもシンプルなものなの。夜、男が女の子を探すためにウロウロする。しかも、選んでさえいない。流れ作業みたいなものですね。夜のシャンゼリゼ通りのナンパとか、路駐の車とか。もっと微妙なら、心が動かされることもときどきあるけど。

アンヌ：でも、私たち、そういうのって熟知しているでしょう？ シャンゼリゼ通りで啓蒙活動のチラシでも配った方がいいかも。ここでは何の話をしているんだっけ？ 山ほど停まっている違反車を排除したり、シャンゼリゼ通り用の場所を用意したりする方法を話し合うんでしたっけ？ シャンゼリゼ通りのナンパのことなんて、誰も気にしてないでしょう？

レイチェル：でも、女性同士の同性愛のナンパも彼らと全く同じですよ。私に言わせれば、もっとひどいかも。というのも、女性とは違うものを期待していたから。私らは、カテゴリーに分けてクラブ巡りをしています。レザージャケットクラブはここ、ジーンズクラブはここ、アラブクラブはあそこ、という具合に。人間関係からも日常生活からも隔離して、セクシュアルでさえない。体操ですよ。尻を追いかけるのに大忙し。真っ暗な場所にいれば、誰なのかも分からないでしょう？ 「家には彼女がいるのに、何でこんなことをやってるの？ 他にできることがあるんじゃない？」って尋ねたことがあります。そうすれば彼女との関係がうまくいくらしい、よく分からないけど。女の立場で言わせてもらおうと、私は他のことを期待していました。これまで女性のクラブにはたくさん顔を出しているけど、結構ビックリ。あそこにいる女の人たちも好きじゃないんじゃないかしら。あの手のクラブでは、踊るのが大好きでも、踊るだなんてとても無理。だって、あそこで誘われたら、それはダンスじゃなくて、ナンパだから。一度、何人かのグループで踊り始めて、楽しくなったことがありました。そのときは、誰もが他の人から何かを手に入れようと目を光らせたり、皆が落ち着かなくなったりするほど閉鎖的ではなかったのが幸いしたんでしょう。他の人をモノのように扱うのは、私たちフェミニストの名に値しない。それから、ナンパのことを話すときには、人間関係の在り方を考えますね。

エヴリン：ナンパはされたことはありますが、ナンパする方はどうすればいいのかよく分かりません。それに、ナンパされても、気がつかないくらい。言いくるめられていることに気づいたときには、ひどい被害妄想になりました。そのまま何もできなくなっちゃって。にっちもさっちもいなくなっって、何でこんな状態なのかも分かりません。試したのはいいけれど、1歩進んで4歩下がる感じで、結局、その女の子とは何も起こりませんでした。

カトリーヌ：ナンパしてもらうには、いろいろなことをやらなくてはダメ。私はこれまでナンパされたことはあるけれど、相手を避けるような行動を取っています。魅力的な女の子たちに対してもそれは同じです。

エヴリン：ナンパって男だけがすることなのかを思っていました。でも、態度や身振りで、女の子からナンパされているんだと気づいたんです。そんなときは、たいていバケツの水をぶっかけますね。「で、私と寝たいわけ？」とか言っただけ。もちろん、相手はそんなことをされるなんて予想だにしないでしょうけど。

アンヌ：私たちの小さな体の何がそんなに大切なのかしら——守らなくちゃいけないくて、寝ようと狙ってくる相手を拒絶しなくちゃいけないほど。

アニー：知らない女がナンパしてきたら、「ああ、この人にとって私は単なるモノなんだな」と自分自身に言い聞かせることですね。

アンヌ：男と関係を持つとうとして身をもって分かったのは、男からモノとして扱われると、本当に嫌な気分になるということ。ドリルみたいに無理やり入ってきて、痛みのないときだって何も感じない。それに、やり終わったら……もううんざり。それが、モノとして扱われるってということなの。特に、背後からナンパしてきた男には要注意ですね。「お嬢さん、歩くと遠いの？」「学生？」「一緒にいていい？」こういう輩は、微笑んでいけば退散します。その人とセックスしても、結果はひどいと思いますよ。立たないか、立ったとしても、あっという間に終わるのが関の山。何もかもいいことなし。でも、直接的だけどいい感じのつきあいもありますよ。会議のあとで、ある男性が声をかけてきました。「今晚、君のところに行って、寝させてくれない？」って。私はすぐに、いいわよって返事しました。だって、あっさりしてるし、率直だし、はっきりしているし。本当によかったです。それまでに何度か政治の会議でお互いのことは知っていたから、2人の関係はもうすでに始まっていたってということ。もちろん、通りで声をかけてくる男ではないです。でも、通りでナンパされても、それがとてもいい感じなら、さっきみたいなことだって十分あり得るでしょう。だって、政治の話のアプローチの方が、よくある日常会話のアプローチより優先順位が高い理由なんてないんだから。

「いいな」と思った相手が、実はとんでもなく怖い人だった

カトリーヌ：私たちって、「いいな」と思った相手が実はとんでもなく怖い可能性もあるということを経験したことはないんじゃないかと思うの。怖いってというのは、たとえば、どうやって対応したらいいのかわからないようなことに引きずり込まれるとか。私の場合、異性愛者からレイプされたことがあります。嫌だっていう勇気がなくて。だから、「いいな」と思う気持ちが怖くて。まだ「やめて」って伝える方法が分かってないんだよ、と自分に言い聞かせています。

エヴリン：問題は、女の子が、あなたと寝たいと言いに来る可能性もあるということ。しかも、あなたの返事が「Yes」である可能性も、「No」である可能性もあると知っているのです。

キャシー：不思議なんだけど、「Yes」と言われてげんなりしてしまうこともある。たとえば、夜7時に、これまでセックスしたことがなかった憧れの女性に声をかけて、セックスしたいんだと言ったとしましょう。それで、その彼女が「Yes」と答えたら……いやいや、そんなに簡単に答えてもらいたくなかったと思うのでは？ 思い描いていた通りに全て進めばいいっていうもんじゃないもの。

クリスティアーヌ：ナンパで重要なのは、何が含まれているかではないっていうこと。何も欠けるもののない全体性が問われているのね。

カトリーヌ：ナンパされるとき、リラックスできないものなのかしらね。

クリスティアーヌ：見ず知らずの人に目の前に来られたら、震え上がっちゃう。詳しく知らないのに、誰かほかに人にそんなことが起るのを見るだけでも、他の女の子がナンパされているのを見るだけでも、震え上がると思う。

カトリーヌ：私はそのとき自分がどんな気分なのかによりますね。男から品定めされ始めたら、落ち着かなくなります。どこを見ればいいのか分からなくなるし。全く逆で、すっかりリラックスする場合があります。全てスムーズにいて、男が来るのを観察している感じ。なぜあるときは大丈夫で、あるときはダメなのかしら。起こっているのは同じことなのに。そんなふうに品定めされても何も関係ない場合もあれば、震え上がってしまう場合もあります。

エヴリン：1968年5月、ある女の子が通りで私に声をかけてきたんです。危うく彼女のシトロエン 2CV にひかれるところでした。車を止めると、ドアを開けて、「乗って」と言われたんです。私は「いいわよ」と返事をして。それ以来、彼女には一度も会っていません。

カトリーヌ：面白い話ですね、他のどのナンパとも変わらないのに、「いいわよ」って言うときもある……。私の場合は、抑制がかかってしまうので、抑制をなくしてしまいたい。ナンパされたとき、それに、うまくナンパできたこともないので、相手に「あなたがほしい」と言うだけで、いつも3階から飛び降りようとしているような気分になってしまいます。

クリスティアーヌ：失敗への恐怖心が抑止力になっているのね、私もその気持ち、よく分かる。つま先立ちで歩くのはそのせい。そうすれば、気づかれずにそこからでていけるでしょう？

アンヌ：失敗への恐怖心ってどういう意味ですか？ 拒絶されるという恐怖心、人間関係から抜け出せなくなることへの恐怖心？ 私は受け身になる傾向が強いのでなおさら、自分がナンパするのとナンパされるのを区別するのは間違っているのだと分かりました。私はたいてい待っている方なのだけれど、それって、まるで、何か正式に合意して人間関係を形にするには他人が必要だと言っているみたい。最初に行動するのはいつも相手だから……動き出せないでいる理由のひとつは、特に女性が相手の場合、セックスの方法を知らないと思っていること。だから、手ほどきをしてくれる人が誰かいないければなりません。もうひとつが、その人たちを知っている場合、彼らの人間関係を壊して、続けていけなくなることが怖いということ。たとえば、男と同棲している女の子がいるとするでしょう？ その2人の関係をかき回したくないのよ。それは、知っているのが女の子ではなくて男の方でも同じ。2人のことを知らなければ、話は別なのだけれど。誰かがセックスしてくれるって分かっているのにそこにいないときは当然だけれど、ビクビク怯えていないときも、相手はセックスしないものでしょう。自分の身体がどうなっているのかよく分からないけれど、私の行動パターンは変化していて、今、言い寄られることは滅多にない。別に、以前はナンパされたがっていたわけではないの。その反対よ。外にいるときに考えていることに関係するのだけれど、私は自分がナンパか何かされると思い込んでいたのです。今はそんなにナンパされることもないですけど。ナンパされても大丈夫だから。今はそんなことが起きても全然気にしないので、全く問題ありません。ナンパされることが怖いときは、体が怖いのだと思います。特に、ナンパするときって後ろからくるでしょう？ だから、いつも気にしていなければならぬし、歩き方だって変わってしまう。ほら、そういうふう待ち構えていると、男が寄ってきますよ。

エヴリン：そもそも全体像がよく見えません。別の人とセックスでつながる方法なんて決して誰も教えてくれないし。昔の両親のロマンスの話は聞かされたけれど、当時はお目当ての女の子と遊ぶにはいい男を見つけられなかったとか。社会の行動規範は教えてもらったけれど、セックスに関しては、何も教えてもらっていないでしょう。悪いことだから、誰も話さないのね。タブーだから……私たちは自分たちのやり方を作っていかなければならないということですよ。ルール全体をね。ウィンクだとか、通りで女の子に触る野郎とか、そういったことは、たぶんパターンがあるのではないかしら。でも、そこにあるものは全て、今はまだないものに置き換わらないと。だって、男から言い寄られるなんて考えただけでゾッとしません？ あの手の輩は好きじゃないから。私、男に対しては対応が違うんです。というのも、私は中学生の頃から男に対してガードを固めてきたから、男はすぐに、「ああ、こいつを口説こうとしても時間の無駄だな」、「こいつは落とせない」と理解してました。女の子に対してもまだ、ナンパされてもまだ守りに入る傾向にあります。というのも、私には女の子の行動が男の行動みたいに見えるから。皆は、一体どうやって女の子にアプローチするのですか？

アンヌ：セックスだけがナンパの目的という話なら、はじめて会う人とセックスしたいと思ったことはないですね。

カトリーヌ：女の子がナンパしてきたら、憧れや賛美の類の感情があるので、あなたもその気になるのでは。だって、滅多にないことだから。

エヴリン：ソルボンヌ大学に、私をナンパした女の子がいました。お互い品定めして、彼女がウィンクしてきて、その次には彼女の隣に座っていました。あれが本当のナンパ。でも、本当に珍しい。ムーブメント以前はそんなふうに女の子を探すのが格好よかった。

アンヌ：ナンパは悪いと思いますか？ 暴力行為として見られるので。

エヴリン：男が通りで体に触れてナンパしてくるとしたら、それはやりすぎだと思います。私に言わせれば、抑圧のひとつの形ですよ。私が女だから、そんなふうに扱ってほしいと思ってるって言うことでしょうか？ やりたいことができる。それって私がモノだということですよ。

カトリーヌ：現在見られる人間関係で難しいのは、サインを出しても全ていろいろな方法で解釈されてしまうこと。唯一無二のサインはもう存在しません。今は、一人一人にサインがあるような感じ。

エヴリン：個人的には、ナンパしてもらいたいからって、私に女の魅力を使う子たちがいるんだけど、それは勘弁してもらいたいですね。私はぐいぐい来る女の子に引っ張ってもらいたい方だから。

アンヌ：話を聞いていると、あなたはよく知っている人に対して心が動いて、相手から間違いなくサインが出てくるまで待つタイプのようなね。でも、それって判断するのがとても難しくないですか？ だって、間違いたくないでしょうし、自分自身に無理強いしたくないでしょうし。それに、あなたが主導権を握る立場になると、サインなんて全く探していない人に対して害を与えているかもしれないと気づきます。だから、私もどちらかという「女性」「受け身」の役を取るようにして、主導権は相手に任せます。相手に任せれば、私に負担が加わることはないでしょうから。

キャシー：ということは、相手に行動しなければならぬ立場を押し付けることで負担を与えていないと考えているの？ あなたに負担を与えることはないとしても、彼女は行動を起こさなければならぬから、彼女自身にムチを打つことになるだろうな。

互恵の関係

クリスティアヌ：片方が与えて、片方が受け取るというヘンな図式に何だかイライラしてきたわ。互恵のパターンって、これまでほとんど存在していなかったように思う。これまで話してきたどのケースも「そんなことがあったね」と言われておしまいなんだろうな。私が今気になっているのは、互恵の関係の具体的な例です。

アンヌ：でも、それは雲をつかむような話でしょう。私たちが出会った人たちや私たちの記憶のなかにいる人たちは星の数ほどいるけれど、そのなかでも互恵関係を探すのは難しいのでは？

クリスティアーヌ：. 私は体験したことないし、なぜ体験したことがないのかもよく分からない。ただ、私が人に会って何か起きるときには、決まって2人とも影響を受けます。片方からもう片方だけに影響することではない。それはたぶん私自身の接し方のせいかもしれないわ。待っていたり、飛びついたりするよりも、人の話を聞く方だから。

エヴリン：ワンダと私の間でも、まさに同じことが起きました。でも、私にとっては異常事態といってもいいでしょうね。はじめて出会った夜、話が盛り上がって、私の家に移ってから話を続けて、結局、1つのベッドで寝ることになりました。その当時、うちにはそれしかベッドがなかったから。それで、思い始めたんです。この子とセックスしたいかもって。彼女も同じように感じていて。まさに、引き寄せの力。私が彼女に触れたら、自然と進んでいきました。

クリスティアーヌ：作業仮説を立ててみない？ こういうことが本物で、その他のことは、服従、条件付け、慣習、偽り。実際の事実に互恵の関係がない限り、行動を起こすべきではない。

キャシー：でも、ナンパが終わり、互恵の関係が始まるのを見分けるのはとても難しいのでは？ だって、自分だけでなく、相手もある話だから。

アンヌ：互恵について話すときは、出会った2人の人物は出会うべくして出会ったという考えを持っておくといいかも。仮説を立てるには別の方法もあります。どのようにして誰かと関係を始めたかという観点で探ります。これは、関係を始めた人が誰であれ、互恵の関係から始めます。

クリスティアーヌ：私の作業仮説では、宿命は普遍的。誰もが経験できるものではないとしたら、それは私たちがひどい状況にいるからにすぎない。互恵は、慣習やパターン化、習慣から切り離されときに、特定の時点で存在できるもの。でも、そのときしか存在できない。

アンヌ：そうすると、前に話していたことと矛盾しませんか？ 主体的であれ、受け身であれ、セックスしたり、体の関係を持ったりすることに不安を感じていると話していたでしょう？ 全てのレベルに互恵関係があるのだとしたら、どれもこれも行動を変える必要があるのではないかしら。私のこれまでの関係で、初めから互恵だったものなんてほとんどないです。たとえば、私は長い間、ある女の子に恋をしています。劇場で過ごす夜は特に好きでした。肉体的な関係は全くありませんでした。互恵なのかどうかは全く分かりませんが、ムーブメントの前は自分が同性愛であることを封印していたので、この関係は夢物語的な体験になりました。変わった関係ですよ。2人の関係については

あまり話もしないし、お互い触れたがりません。だって、パンドラの箱を開けるようなものでしょう？

クリスティアーヌ：互惠関係を阻むのは、私たち自身が抱えている悩みや不安、それに自問自答よね。

キャシー：互惠関係は存在できても、関係が煮詰まる場合はあるでしょう。

アンヌ：でも、そんなときは、待ちの姿勢をとるようにして、相手に主導権を取ってもらうようにしています。

エヴリン：性的な互惠関係を別物として捉えるべきではないですよ。人間関係はあらゆるレベルにあるのですから。

アンヌ：私の場合、肉体関係が多少なりとも気になり始めると互惠関係の問題が生じ始めます。つまり、くだらない問題が始まって、抑制だの、タブーだの、強迫観念だの、いろいろなことがめちゃくちゃになる原因がたくさん噴出するんです。

エヴリン：なぜ全体を知る必要があるのでしょうか？　だって、片方の人はセックスでコミュニケーションを取りたがっていて、言葉のやり取りに必要な質問さえでてこないのに。誰かと話すのは、相手の人も話すのが好きだと知っているときですよ。そうでないと、一人だけで話すことになります。

クリスティアーヌ：とにかく、セックスが見えてくると、不安になって、「No」と答えたくなくなるのよね。

キャシー：でも、それは、目の前の女の子だけに任せる問題ではないでしょう。その瞬間、自分が何を考えているのか、セックスに対して受け身なのか、その時点で本当に恋に落ちているのか、そういうことにもかかわってくる。「いろいろあって、今すぐはダメ。でも、ちょっと後でもう一度いい？」とは言えないものねえ。

仏英訳 訳者 Gila Walker